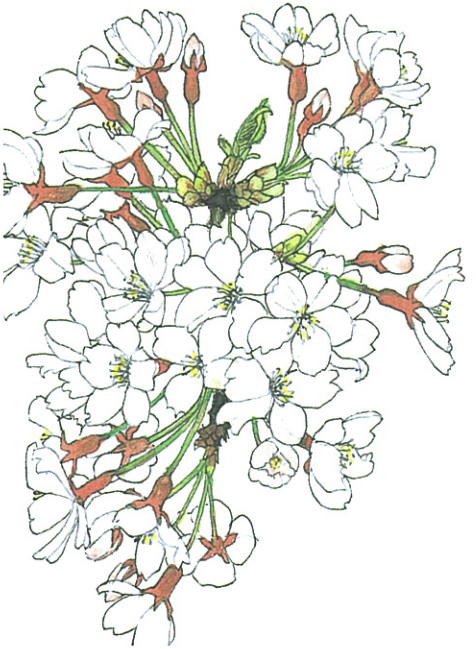
今泉由利集

地球にてII



新編日本全国歌人叢書　10

今泉　由利集 ― 地球にて　II

ボストンにゐる

ロッキーの真白き雪山続きつつ明り見え始めて山脈は終る

それぞれの明りをともして人間は地球を見下ろす地球の夜を

アララギの赤き実さえざえ稔りゐるニューベリーの街を由野と私と

柊の赤き実のなりてアララギの赤き実もなるボストンの街

団栗を一つ拾はむと探しゐて栗鼠と視線が一瞬合ひぬ

レガッタはチャールズリバーを波立たせ我のブーツの爪先ぬらす

ボストンのチャールズリバーの水の辺には赤のまんまの小さきひと群

風強き日の続きつつチャールズの川岸の蒲公英の種飛びてゆく

プレツェルを売りてをりたりプレツェルを食みつつ歩めるボストンにゐる

目覚しはハラヘッタと鳴る猫時計子は授業に
出でてゆきたり

もうすぐに雪降り始むるボストンにて完熟ト
マトの赤きをむさぼる

オイスターとチェリーストンとクラムチャウ
ダーとボストンの吾の日々の過ぎゆく

満月は昨夜の丸さそのままに月の明りのボス
トンを去る

朝焼けに明るみ始むるボストンの街を見下ろ
すはつかの間にして

漸くにロッキー山脈の木々の見ゆるロサンゼルスに近付きにけり

アメリカとの時差に目覚めて真夜中の東京の空東京の街

抹茶塩

夏草は枯れてゆきたり関東平野折々ぶらりと赤烏瓜

穐田は枯れて広がる関東平野枯れ色の向ふに陽の没みゆく

新幹線と水戸線と真岡線と乗り継ぎ来たれり
益子の町へ

富士山の山の姿の変りつつ関東平野をかけ抜
けてゆく

白くしてやさしき冬の桜花益子にては花びら
の舞ふ

紅殻の益子の色のマグカップ土厚くして今朝
のコーヒー

小貝川と五行川と鬼怒川と利根の支流をうろ
うろうろ

八粒の赤き実のなる千両のわが小鉢にも鵯の来る

東京を発ちきてたちまち雪を踏む一歩一歩は唐崎松の下

細雪をきしませ歩む兼六園わが足跡に次々の雪

透き通るみずだこの刺身は抹茶塩をつけて食ふなり能登半島は

雪雲を映して暗き富山湾にはのど黒といふ赤き魚をり

正月の支度の人等にまぎれつつ甲箱(こうばこ)がにを見てゐる輪島朝市

雪の落つる音の大きくするばかり永平寺は厚き白雪の中

靴下とスリッパとにて身をかため我は従ふ跣の僧に

長廊下は潔し清しき永平寺母は歩みき私も歩む

犀星も芭蕉もきっと歩みしと犀川の音を聞きつつ眠る

源平の携帯食の丸ゆべしひとり籠れるわが保存食

やけつぱち

やけつぱちになることもありわが膝に三味線のこの重量感

けだものの皮の張られてゐることを時々思ひ三味線を弾く

わが膝には思ひのほかに重くしてカリンの材にて作れる三味線

三味線を爪弾きしつつ思ひいづ仕舞ひしままの小紋のことを

日本人の体型すでに変りをり足長く描く今日のクロッキー

天からの降り来るものを見てをりぬ常の景色のま白くなりゆく

静かなる白き気配に目覚めたりひたすら白き洗足の朝

雪降りに最も乾きゆくといふ輪島の漆の赤き大椀

日本海の雪どけ泥のつきたるままのブーツを
気にして青山通り

部屋に置く幸福の木の垂れる葉に指先ふれつ
つ肩凝り体操

駒形のどぜうにはどぜうにむく酒あり桝にて
飲みぬ一つ角より

新幹線に三百キロを乗り来たり東京と同じき
ゴシップしてゐる

面影は日々にうすれて故里の曲れる小道のあ
のことこのこと

まだ曲を思ひのままに弾けずして口ずさみを
り三味線の曲

たしかに

ひた走る新幹線の夜の座席故郷の水仙の香り
させつつ

巻き終へたる白菜のひとつひとつごと白雪の
れり関東平野

飾りなきただ黒色の絹を着て華やぎてをりそ
の光沢に

父母の暮しの中に柿右衛門の器ありつつ育ちきたりぬ

泉山の白磁石のひとかけら我ポジェットに重さを増しぬ

ヘタ幾つ乾きて残る柿の木のたしかにありて柿右衛門窯

伊万里川の海となりゆく方向に添ひつつゆきぬ伊万里の町を

朧げに活字にて知りし有田皿山を歩みてゆけり我が歩幅にて

唐津焼の湯呑を携へ戦争にゆきにし父ありて
唐津御茶盌窯

鯱ほこを屋根に掲げる家々の向ふに見ゆるは
玄海灘なり

紀貫之和泉式部小野小町今日は私の勿来の関
を

吹く風に勿来の関の紅梅の花びらの散るひと
ひらひとひら

十歩二十歩勿来の関を越えて歩く石畳道は下
りつつ続く

朝食に干芋の日が続きをり茨城へ行きて戻りてよりは

鍋島の藍の手描の小鉢には鰈の卵のうまき煮つけを

心のままに

七十年の前の日付の印さるる一刀彫りの雛を今年も

赤き実となりゆく白き小花咲きて窓越し日向のXマスホーリー

水仙に母の思ほゆ紅梅にも母の思ほゆる藪椿
咲く

自らの心のままに自らの身体のままに今日を
過ごしぬ

通勤の時刻の電車に分け入りて菜の花畑へ行
かむたくらみ

東京湾は相模湾と変はりゆく洲崎灯台の風強
く吹く

房総の海より山まで続きをり菜の花畑の黄色
の反射

花のための花々満つるその中に蚕豆の花の淡き幾畝

房総の最先端を目指しゆき岩海苔育む海のたりのたり

日蓮の銅像に並びて背のびして同じき景色をわれも見てゐる

泥玩具の願満の鯛の加はりてまた続けゆく私の日々を

ご苦労さまです

大利根の橋を渡りて旅ゆきて新利根橋を渡りて帰る

白きまろきのびる一と束を求めたり東京銀座の大きデパートに

行く道に花咲きてをり花の下幼きお釈迦へ甘茶の雫

どこへもう行きたくはないと言ひながら今日は三春の桜の蕾

三春なる張子の赤き鯛車わがフロアを走らせてをり

紅梅は幼き実となり白梅も幼き実となる毎日の道

故里にて白タンポポを見つけたりそして電車に乗り遅れたり

道のへの花蘇枋(はなずおう)の花の色仕舞ひしままの綴れ帯の色

知る顔にゆきあひながら故里の葱は坊主となりたる小道

山の色は春の霞に同化して雪のみ見ゆる富士の形に

富士駅身延山駅甲府駅富士川は沿ひ笛吹川は
渡りぬ

木々の種の数ほどに緑の色はあり身延の山へ
わけ入りてゆく

日蓮は徒歩にて身延の山頂へ私はロープウエ
イにのりてゆきたり

木の葉蒐のブッポウソーは録音にしてロープ
ウエイは杉木立をゆく

富士山と富士見山に挟まれて身延山頂には片
栗の花

身延川の石こゆる流れの音聞こゆ五十三歳の日蓮草庵の跡

ひと言もものの言はぬままと思ふ時修業僧のご苦労様です

木花咲耶姫命

東京に小さく住まふわが家に帰らむためにと津軽の一夜

桃色に棚引く所は桃の花白く棚引けるは梨の木の花

山桜の樹皮のつやつやのぐい呑に地酒を満して秋田にゐたり

人工のごとくに平野の広がりて八郎潟に来たりしを知る

背のびして幸福の木の葉を拭きてをり幸福の木は天井に届く

三階より足音響かせ下りきて今日の渋谷の人等にまじる

三百キロを離れて住まふわが父に今朝は雨降ると天気予報す

三百キロを新幹線に乗りゆきて梅花空木の一枝の下

大いなる堆積岩に腰をおろす今日の自然の多摩川上流

一つ一つの岩の生ひ立ちを忍ばする岩伝ひゆく鳩の巣渓谷

岩の間を流るる水音大きくて黙し食べをり手打のそばを

しばらくは見上げてをりし石段を登りて出あふ木花咲耶姫命

常よりも手速く終へぬシャワータイム奥多摩
湖に行きて戻りて

毎日のわが蛇口よりほとばしる水源をのぞく
奥多摩の湖

この世の中に

白々と山法師の花の浮かびゐて常より遅き帰
りを知りぬ

まつたくの自然なことにて父と私の昼過ぎて
ゆく夜過ぎてゆく

鳥貝のうち紫の貝殻を並べ置くなり増え続けゆく

ゆつくりとゆつくりと起重機（クレーン）は動きをり東の窓にも西の窓にも

バケツ一つの田植を終へて背伸びするわが一（ひと）椀に足らざる田植

わが背丈を八センチほど高くして晴海通りを歩みてゆけり

手応へのありて筍を折りてゆく苦竹林に匂ふ苦竹

筍は広口ビンに挿しておくもうこれ以上伸びない苦竹筍

何もかもいやになりたる心地してヒメヂョヲンの細き花びら

冷蔵庫には江戸の地酒が並びをり時々ドアを開けて確かむ

蓮の種と南瓜の種と西瓜の種とこの四五日のわが食として

わが住まふ三階より一つの階段ありてこの世の中に繋がりてをり

つぼみだけの朝顔並ぶを見て歩む朝顔の花は
明日の朝咲く

はるばると

雨雲を突き抜けゆきたり雲の上にまだ浮雲の
ありて流るる

夕焼の色に合はせてカンパリを飲みつつ飛び
ゆく大平洋上

死んでしまふかもしれない思ひにて積乱雲を
突き抜けてゆく

地球より一万メートルの空にして常のごとくに息をしてをり

ほんのりと酔ひてをり雲の上にて人間といふことを知りつつ

暮れてゆく闇の中へと飛びゆきて明けくる大平洋を飛びつづけゆき

飛行機の窓にやさしき丸み見ゆ丸き地球のほのかな丸み

少しばかり宇宙の中にのりいだして星ばかりなり飛行機の窓

あまたなる星々の一夜は終りゆく明けの明星
一つ残して

星一つ明けゆく空に残りゐてわれはサンパウ
ロに近づきにけり

日本円とドルとレアルとそのうえにペソを加
へての私の旅

雲海の上にわが乗る飛行機の影動きゆくはか
なく小さく

ただ白き雲あり汚れ雲もあり雲の下には地球
のありて

拾ひ物はラパチョの花と椰子の実とイーピラペラの朝の公園

はるばると飛びて来たりて二万キロイッペーの花の今散り落つる

日本より一番遠い国に来つわが家のありわが友の居り

ラプラタの河面に映る羊雲のその上をとぶわれの飛行機

スペイン語を話してをりし一日の暮れてゆきたり夕焼残る

まんまるの月を見上げてゆきゆきぬラプラタ
河に月は映りて

思ひ出を多く語りて肉を食ふアルゼンチンの
深夜の食事

秒針はまはるまはるまはるアルゼンチンでの
時は過ぎゆく

もう忘れない

三十年住みし我が家の影は伸びてアルゼンチ
ンの陽は沈みゆく

天際を行くジャンボ機に身をまかせアマゾン
河の蛇行見えつつ

花茎は高々と高くそびえ立ちカリフォルニア
の竜舌蘭の

朝鮮薊（アーティチョーク）の今は盛りの畑に来て朝鮮薊の料理
に遇はず

黒部平に今日咲く花はシナノナデシコこの淡
紅はもう忘れない

立山の山々連なる眺めには野口五郎岳黒部五
郎岳

地に近く優しく咲きしはチングルマ萼残りを
り弥陀ケ原には

立山のまろき石に腰をおろすヤマハハコの白
花近く

雲の上の山々は日差しのまぶしくてこの雲の
下は曇りなるべし

足元より雲わきあがり雲の上にわれは立ちを
り立山中腹

風のなき日に来(きた)りて風を知るみな傾けり立山
の木々

シシウドは細かき花を咲かせつつ大木となりて霧の流るる

ミヤマとタカネとが名に加はりて高山植物に今日は近寄る

アララギの大木の間に間に垣間見る穂高は少し雪の残れり

うば百合は咲きたるらしき花がらを高くかかぐる今行く道に

梓川の水の流るる音のして終日われは水音の中

アララギとブナと唐松とを確かめつつ梓川の流れに沿ひて

ひかへめに一日過ごしてわが部屋に吾亦紅の花を散らしぬ

霜降り茸を醤油につけて焼きにけり今宵は砺波(なみ)の地酒のありて

好みのままに

季節には係はりのなく咲き登るカサブランカの今日も香りて

鮮やかに黄色冴えをり菊の花のすがたのまま
のテンプラですよ

秋となる雨降りてをり窓ぬれてワインレッド
の傘さしゆかむ

「夕立の」江戸小唄を習ひ終へて今日より
「秋の」七草の唄

ジャマイカのブルーマウンテンの香りつつ日
曜の朝の遅き目覚めに

思ひ出は今年もかくも鮮やかにて曼珠沙華は
わが母の華

地球の四万キロの旅を終へて訪ねむとするは
病床六尺

走りても走りても山また山深き厚き緑の奥飛
驒をゆく

自らの好みのままに過ぎゆきつつ今日の終り
には銀杏を食ふ

白く白く月下美人の咲く夜も常の日ごとく
カーテンを閉ず

富士山の見ゆる間は富士山を見つめてをりぬ
雪を抱かぬ

昨夜酔ひし赤花からを残しつつ今日の芙蓉も
酔ひはじめたり

二百キロにて走りつつをり車窓にはもう曼珠
沙華の赤は見えない

布一枚まとはれたちまち見失なふ組みたる膝
の組まれたる辺り

8Bの鉛筆を斜めにまた縦に描きゆくなり日
本の女人を

目覚むれば声掛けあふといふほどのことさへ
新し由野とゐる日々

自らの電話番号鳴らすことつひになきままの
ひとりの暮らし

アルゼンチンに生れし吾子と今日は食ふは江
戸のモンジャといふ鉄板焼

何がために

何がために今日の一日ありしかと独りをりつ
つ独りの思ひ

本当の気持を伝へ合ふことのこのごろなくて
独りにこもる

きのふよりいくらかほけしすすきの穂私の歩みにつれてなびくよ

高きより隅田川を見下ろしつつ今日八百善の穴子蒸しずし

肌寒く目覚めて今朝はま白なる富士山の見ゆる私の窓

壁面に能面小面をかかげつつ今日の憂ひの治まりゆかず

新橋を音なくして発つゆりかもめコンピューターが運転してゐる

運転をすることにまで人間をはぶきてしまひぬ運転席は無し

ただ広くただに平らの東京湾の埋立地をゆく歩幅大きく

けたたましき車の風圧を受けてをりレインボーブリッジに歩道のありて

お台場の水上バスの澪標止まるは都鳥一羽また一羽

自らの手に書きゆけばたちまちに終はるべきものを機械通して

マウスポインターは思ふ方にはゆかずしてゆきつもどりつ時をかけつつ

わが家のカーテンの色の小豆色わがホームページの画面の色に

熱帯の紅木紫檀にて作らるる江戸三味線の音させてをり

もうすでにオホオニバスの葉の上に乗れざるほどに育ちたる由野

パンの木の巨き木の葉を見上げをり夢の島のゴミ埋立地跡

パンの実の料理方法を聞きておりパンの木に
まだ実の成らずして

あまりにも地中深く潜りゆくをためらひつつ
も地下鉄有楽町線

時ありて

昨日今日明日もまた待ちまつか明後日には大
和へ行かむ

八重桜に名前を残せり普賢象の鼻を見てをり
岩船の寺に

なだらかなる起伏のままに歩みゆく当尾柿の
稔りの中を

すつぽりとわらひ石仏を覆ひつつ当尾の葛に
は枯葉のまじる

道の辺の石ころにつまづくことにすらたのし
くしてけふの大和は

鬼瓦の鬼の角一つ欠けしままに静まりてをり
浄瑠璃寺境内

ひと袋七個の単位を喜びて無人売店の当尾の
干柿

大和なる古代の土に育まれし蕪のま白き漬物携へ

逆立をしてゐる狛犬も蓮の裏葉も大和の古寺の鬼瓦達

茎紅く大和の土より立ちてゐる赤蕪畑を通り抜けゆく

長屋王の墓をめぐれる生垣にクリスマスホーリーの一本まじる

樟の木の聳え立ちつつ長屋王に近寄りて墓離れても墓

春菊の緑よみがへる鍋を囲み七つの杯に奈良の地酒を

長屋王と吉備内親王との墓近く眠らむとする私の一夜

巡りゆく天皇陵のそれぞれにどんぐりを踏みどんぐりを拾ふ

日本の始まりの地のまほらなる水溜り道に跳ねをあげつつ

柿の実と桜紅葉との照る中を登り下りして佐紀路と佐保路と

風化せし木目の中に太陽のぬくもり籠れる不退寺濡れ縁

犬つげの青き柱群に千年の時ありて今日の平城宮跡

ひた走る新幹線の車内にて浄瑠璃擬宝珠の莢弾けたり

追ひ羽根

心ほどにはもの言はぬままに帰るなり新幹線は走るくら闇の中

駅よりの道はすでに登り坂徳川家康の墓地までつづく

木もれ日も届ききたらぬ杉木立日光山の空気しつとり

追ひ羽根のやさしき華やぎ引き締めて無患子の実の丸き真黒

注連縄の緑の藁の匂ひして浅草寺ガサ市の人込みの中

真白なる富士山の方よりまつすぐに私の窓に吹きてくる風

人間の声の聞えてくることなし昼も夜も自動車の音

大和なる田圃道にて抜ききたれるまろまろ野蒜の掻玉スープ

大和には三椏の花の咲く頃か銀色の蕾を仰ぎ見てきつ

白く咲くはセクコクランにて心安く十晩ばかりをわれ留守にする

今出づる朝日に照れる雲はなし厚く積れる雪を見にゆく

枯れゆきてなほも大地を覆ひゐる葛蔓の葉に
霜のま白し

ブドウ棚は冬枯となりて山に至る昨夜は飲み
ぬ勝沼ワイン

木曾川の小さき支流のあららぎ川しばらく流
れにそひてゆくべし

かどのとれたる石ゴロゴロに添ひ下り大いな
る木曽の川となるまで

まづ山が真黒く暮れてゆきにけり家の明りは
飛騨の高山

あららぎ川に沿ひてゆきたりアララギの老木
立ちて妻籠の宿は

物の名にまず飛騨とつく高山にて飛騨の匠と
飛騨の地酒と

荘川の流れ始まる辺りより沿ひ下り来ぬ富山
湾まで

留守番電話

百年をかけて丸太の燻製を作りつづくる合掌
の家

茅葺の郷には茅葺の寺ありて茅葺鐘楼より梵鐘の音

百年をかけて今なを住み続く合掌の家を覗くが観光

高山の上三之町の生溜を携へてなほ旅続けゆく

赤味噌のしずく幾滴か生だまり後生大事にさげてをりたり

飛騨の国への旅にしあれば朴の葉にのせて木曽の赤味噌を焼く

今日宿る窓にゆつくり暮れてゆく飛騨山脈の
穂高の山は

元旦を二日に延すたくらみにけふまたジャン
ボジェット機に乗る

日本とアメリカとの正月を過してわれの一九
九七年はじまる

飛行機に乗りてむくみたるわが足にサンタモ
ニカの磯砂さらさら

25セントの銅貨を4個ポケットに入れていで
ゆくコインランドリーへ

すしバーとシャブシャブとの交互にてカリフォルニアの幾日か過ぐ

頭痛薬の二粒ほどを持つことに安らぎてをりジャンボ機の中

オーク樽に今年のワインは納まりゐてナパ・バレーは冬の最中よ

空港に降り立てばすでにカジノにしてラスベガスはコインの響

九十九里の磯波いくすぢ白く見て日本の国へ着陸体勢

犬の吠ゆる声聞えくる留守番電話掛け人知れず吠え犬知らず

もの言はぬメッセージ幾つもあり留守番電話に留守よみがえる

いまだ見ざる四万十川の青のりのよきかほりするけふのわが家は

飽きてしまひし

冬枯れて絡まり這ふヘクソカズラに今日吹く風は春の一番

この路地は抜けられるかしら冬枯れの草木の鉢の並べてあるよ

やうやくに職を得たりと留守番電話声ははるばるNY（ニューヨーク）より

富士山の側の座席を下さいと頼み乗りたり新幹線に

東海道の普通列車に乗り込みぬ東京駅より愛知御津駅まで

紅梅か桃の花かと熱海には二月に咲ける河津の桜

ダニマークまで温度をあげて私のベッドやう
やく温し右足左足

屏風画は牡丹の花と罌粟の花と毎晩眠る花々
のあひだに

白梅の模様の手まりを引つ張りて灯りを消す
よ眠りかゆかむ

わが窓の景色はすべて見下ろしにて真白き雪
の富士の山さへも

日本に帰り来たりて住みつきて飽きてしまひ
しことの幾つか

唇に吸ひ付きてくる白魚のこの透明さに雨水
といふ日

亡びゆくものばかりに囲まれて落つる音あり
紅椿なり

白梅の白き花びらひらひらと幼き梅の実を萼
に残して

紅梅の花びらまるまる散りてゆく重量感なく
して重量のあり

十両の鉢におのづから生えきたる名知らぬ草
も十両の価値

雪深き冬を重ぬる五百年一位の木目のやさしき小面

白々とりんごの冬木は白々とりんごを一つ梢に残して

どんな花が咲く木かしらと冬木なる椛の木といふ椛の木の下

桜はいい

ひとつ店の小手毬をすべて買ひ求め三月十三日の真白き花束

白魚も土筆もたらの芽も食ひて季節の移りゆくがまま

留守にする我家に鍵を掛ける音たつた今までの私のにほひ

桜花にあとさきありてまず先にひとつの花の咲き始めたり

降りくるは花びら伝ふひと滴桜木の下に雨やどりして

万葉の頃の人等と同じき物を食ひてゐるかな粥をたきつつ

ジャケットの右と左のポケットには万葉集の四千五百十六首

東京のビルの間に間の細き光は桜の花を細く照らしぬ

暗闇に桜の花は散りをらむ今日の終りの明かりを消すよ

雨音はわが床の辺に聞こえつつ時々激し桜咲く日に

酒はいい桜はいい恋はいい奈良橋教授の万葉講義

無限とも咲き満つる桜の花びらの今の幾ひらは私に散る

生垣は常磐万作の紅き花ひとところやさしき駅までの道

淡き花淡き影をともなひて散り積もりゆく淡き重なり

現状のままに今日も過ぎゆくを空しきとも安きこととも

アマゾンの木彫玩具のアルマジロ私の方を向けて春の日

昨夜よりの雨降りしきる横なぐりわが窓濡れて景色も濡れて

今日の吉野は

近鉄の電車の窓より見むとする三輪そうめんを干しゐるところ

見渡しに千年の日のへだたりのありやなしや今日の吉野は

散りゆきしはたちまち小さき実となれり吉野の山の桜ん坊

吉野郡吉野町吉野山の吉野に来たりてひと晩
眠る

夜の闇の吉野の山に一夜眠る如意輪寺の方へ
頭を向けて

み吉野に一夜の眠りのみにして雨の音なり風
の音もまた

下りくる沸きのぼりゆく流れ流れて雲の生ま
るる吉野の山は

目を閉ぢて巻向山の残像の続きゐるままに眠
りかゆかむ

吉野なる桜の花のその中の蔵王権現像は桜の一本造り

雨風の吉野の山のぬかるみに火焔を恋ひをり蔵王権現像

八重に咲く大き花びら踏みゆきて奥の千本の花びら小さし

ここに立ちて共に濡れをり春の雨に奥の千本の山桜花

幾重にも重なり連なる山なみの今日は吉野山を中心にして

山桜の咲きゐる時にまに合ひて西行庵に花びらの散る

登りゆく吉野の山の急斜面のすみれを摘まず稚児百合を摘まず

山深く雲かきわけて登りゆく西行法師の居られし所

義経も後醍醐天皇も秀吉も今日は私の吉永神社

雨傘はたちまち日傘となりしゆえ水分神社にて小さくたたむ

紫の花房立つる葛の根のあまりに太きを知りたり吉野

渋柿の塩漬けの葉つぱを洗ひゐる媼のをりて吉野の山は

渋柿の大き葉つぱに包まれて熊野の鯖のすしの食べ頃

オンコ

花の色はより紅くしてやうやくに桜咲きをり北海道は

二月に咲く河津桜を見たりしが北海道にては
五月の桜

どこまでもどこまでも笹にて千島笹積丹岬の
強風の中

勇払(ゆうふつ)の原野に実るハスカップはほろ酸つぱく
してジャムとなりたり

太くなく高くもない木々の立つ勇払原野を走
り抜けゆく

行けど行けど北海道に群生する蕗の薹はいま
だ幼し

大いなる羊蹄山を濾しきたる水はたちまち京極の酒

さやかなる透明水をすくひあぐ羊蹄の山を濾して湧きくる

歩みても歩みゆきても続きをり芽ぶきはじめのエゾななかまど

日本の馬には乗らぬことにして鼻筋なでて帰りきたりぬ

アイヌ民族の赤鳶色はアララギにて染むるといふオンコと呼びて

東京の地中深きを行き行きて皇居の堀の水辺に出たり

山査子の花咲き実のなる反復図案今日のディナーのテーブルクロス

ウイリアム・モリスの残せしデザインのマグカップにて今朝の珈琲

ぶつかりてぶつかりあひて人と人と三社祭に紛れこみたり

木花咲耶姫命を祀るとて植木市にはグミの実紅し

梅の実の少し色付く木の影の長くなるのを待ちをりしばらく

生ひ立ち

屋根と屋根ともつと向ふの屋根の間にビワの熟れたる色の揺れをり

駅までのいつもの道のいつもの側のつばなほけしをわが草として

日の入りも月の出も心に掛けぬままこの幾日かの過ぎてゆきつつ

ルピナスの花の紫消えてゆく御殿場山に霧の流れて

栗の実となりゆく花の花盛り山形駅に降りたちにけり

梅雨の雨降り続けをり蔵王山はあのあたりならむ雲を見てゐる

茂吉翁の横顔写真の範囲にてつひに私の生ひ立ちとなる

茂吉翁の坐りたまひしあたりにて台風は激流す最上の川は

極楽といふバケツあり錆うきて斉藤茂吉の記念館はここ

大樽川松川白川流れ合ひて最上の川となるよ舟唄

楢の木の炭となりゆく煙りあがり楢の木林の楢下宿(ならげじゅく)なり

蔵王山に積りし雪の伏流水の酒を飲みたりこんにやく食ひたり

桜桃を濡らして台風の雨降れりやがて最上の川となるべし

法燈は千二百年をともり続く長き月日に頭を下げぬ

閑かさは閑かさのまま残りゐて立石寺の石段を登る

これよりは修行者の道といふ石標より引き返しきぬ山寺立石寺

山寺の石千段を登りきて膝の震へるままにて東京

大杉の下うす暗く登りゆく山寺の石段は天に向へり

思ひ出は両の脛に残りゐて筋肉痛のしばらく続く

ここに来て伝ひきたりぬ『白き山』最上川流るる蔵王の見ゆる

満目の

赤さして棘の鋭き山椒に東京の熱き風吹きわたる

月見草は咲き続けをり咲きのぼり月は下弦へ移りゆきつつ

藪柑子の花は青き実となりて花なき庭となりをりしばし

人をゆるし人にゆるされながらへて絵を描く友も酒を飲む友も

ひとり居る私の部屋の片隅に万年竹は芽を伸ばしゆく

春先に椎の花咲き秋深く椎の実の落つる家に住みをり

嘆こうか嘆かざるかとひと鉢のわがベランダの山椒の未来

故里へ帰りゆく道はみどりなり茶畑は丸く青田んぼは平ら

膝ほどに丈を伸ばしたる青き田に波作りゆく新幹線にて

時々はミネラルウォーターをそそぎやる万年竹は育つよ育つ

満目の水田の尽くる所には津軽の富士のかすみつつあり

山も谷も青きりんごに袋掛けしてこれより先は青森県

白樺とななかまどと十和田湖と今日の一日は雨の降るらし

東北にはやく咲きたり稲の花どこまで続くかすみゆきつつ

人工の平たき平らに疲れつつ八郎潟に一夜眠りぬ

松の木の防風林に囲まれて八郎潟の稲は花咲く

燃ゆる

うちは出しへの招きの便り届きたり駒形どぜう

うのみどりのうちは

あとさきのありて落ちゆく花積り凌霄花の今落ちし花

未知なりしことの二つはなくなりぬねぶたを見たり竿燈を見たり

はるばると青森ねぶたの人混みの人を見てゐる日本の民

電線を持ち上げてゐる係りありひとつねぶた
の祭りの中に

象潟の夏の岩牡蛎の甘くして松尾芭蕉はここ
にも来たり

単線の秋田新幹線は右側に下り列車を通しつ
つゆく

少女にも新幹線にもお米にもあきたこまちと
名付けぬ秋田

五つ六つ蚊のさしたるあとは脛に露草を踏み
えのころを踏み

飛鳥山へ続く坂道を登りゆく移り住まはむ思ひのありて

ポツポツの松明の火は連なりて大の字となる右大文字

大の字より黒き煙ののぼりゆく大の字燃ゆる京都の夜は

山は燃ゆる法の字妙の字舟形幷右大文字左大文字

今日宿る窓に東寺の塔の見ゆカーテン開けて眠らむとす

黄昏はたちまち闇となりゆきぬ五重塔のシルエットあり

東寺なる五重塔の影の上に私の影を重ねてしばし

朝の光に五重の塔の影長し透彫りあり水煙の影

素足にて三十三間堂に入りゆく千体の仏は素足におはす

夏暑き三十三間堂の庭にして印度沙羅の実は房をなし

また新しく

いつの間にこんなに増えしか物と物とトラック二台連ねて引越し

木犀の香のとぎるる所はなし王子うとう坂をかけおりてゆく

磨りガラスにやさしく紅の棚引きて百日紅の家にけふ移りたり

露おびて露草の花の届きたり引越し祝ひと一言添へて

五百年経たる巨き銀杏のこの木のもとに移り
住まはむ

子規庵の近くに移り住まむとす『竹の里歌』
を先ず読み始む

坂の上にモッコク大樹聳ゆるをめざし登りて
私の家

時々はモッコクの木の枝をゆらして都の小鳥
の訪ねくるべし

階段を登り降りして二階家にわが生活のまた
新しく

ほのぼのと喜び心湧きてくるモッコクの赤き実の見ゆる窓

一匹の大き蛙の住みてゐる小さき庭の主となりたり

求め来し箒ちり取りを初めて使ふモッコク落葉とモッコクの実と

常緑のモッコクの木より落つる葉を毎日集むる日々となりたり

天井のやや高き家に移り来ぬ幸福の木は背を延ばしゆく

鳴く虫も青き雑草も近くして黒き土より建つ
よわが家は

色あせてゆくこともまた曼珠沙華田んぼの畦
にも私の瓶にも

ミヤコ笹スズ竹矢竹熊笹と竹の種類に囲まれ
て住む

セイシェルのわが双子椰子は芽ぶかざるまま
に引越しの七度目となる

生ひ立ちは知らざるままにわが部屋にふた葉
ばかりの椰子の実一つ

ひたすらに白くして長き日本の葱は世界に見しことはなき

渋柿の柿色の玉の景色ありここに住みゆくことに決まりぬ

いまだ続きて

遅れ咲く糸瓜の花の黄見えて子規の小庭を探しあてたり

臥してをりし子規に目線を合わせつつ糸瓜の棚の糸瓜はぶらり

ホトトギスも鶏頭も糸瓜も子規の庭明治のままのいまだ続きて

糸瓜水を一升瓶に集めつつ子規亡き月日の長くなりゆく

巨ひなるニセケヤキは落葉する子規なき後に芽ばえしといふ

今日の日も糸瓜が主役の子規の庭ふた巡りして帰りてゆかむ

ひとり住む北千束より越し来たりまたひとりにて王子本町

引越しを終へて我家の大き窓鰯雲あり高く高く

江戸よりの続きの中に私の日々を始むる王子本町

広重の浮世絵景色のその中を歩みゆきたり豆腐を買ふよ

モッコクの紅実弾けて今朝よりの景色変りぬ私の窓

ひとり居のことを忘れて求めたりカンコロ餅の大き一棹

花を見て石垣を見て登りゆく王子うろう坂を
私の家へ

駅までの往と帰りに見あげゆくトベラの実の
今朝弾けたり

白萩は今吹く風に散りゆきてはやも終りぬ今
年の花の

行く道に桜木ありて飛鳥山桜紅葉の時より始
む

残されし言葉のありてうるはしいぬばたまの
実のつやつや光る

山椒の今年の延びの止まりたり山椒の葉に朝日あまねし

権現の山にして大樹山桃は私の小庭の真中に残る

あとがき

第一歌集は、アルゼンチンのスペイン語ばかりの生活の中で、日本と係わっていたくて短歌を始めた昭和五十二年（一九七七年）より、平成二年（一九九〇年）までの十二年間の歌を、〝地球にて〟と題して出版した。

第二歌集は、平成八年（一九九六年）と平成九年（一九九七年）の一番新しい二年間の歌を〝地球にてII〟とする。第三歌集は、第一歌集と第二歌集の間に当たる平成三年（一九九一年）より平成七年（一九九五年）の歌で、近いうちに〝地球にてIII〟としてまとめたい。

外国にいて日本を思う歌、飛行機の中で出来た歌……。これからは日本にいて日本を歌う歌。命ある限り歌い続けてゆきたい。

平成十年　　今泉　由利

著者略歴

三河湾の波静かな海辺に生まれた。
繊維デザインを学んで、学生生活を終える。
地球上の一番遠い国へ行ってみようと思いたち、一九六六年にアルゼンチンのブエノスアイレスに移り住んだ。
今は、アルゼンチンとブラジルとカリフォルニアとニューヨークと日本とに少しづつ住んでいる。

新編日本全国歌人叢書 10

「地球にて II」

一九九八年八月十日　発行

著者　今泉由利（いまいずみ ゆり）

発行者　福沢英敏

印刷　日本図書刊行会印刷部

発行所　㈱近代文芸社
東京都文京区目白台二―一三―二
電話 (03)三九四二―〇八六九
FAX (03)三九四三―一二三二

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

© Yuri Imaizumi 1998 Printed in Japan
ISBN4-7733-6332-0 C0092